

ぷれみあむ
みにっつ

第10集

決死・チョコレートパレスへ！
の巻

☆ shiroa ☆

時間は九時を回ったところだ。整備されていない駐車場は、夏に旺盛を極めたが寒さに駆逐されそうな、寂しげな雑草達が脇にわんさと生えていた。道を挟んだ先に見える、一見工場跡のような建物が、チョコレートパレスだ。夜の闇に溶け、大きな黒い塊に見えるが、本来は茶色い塗装がなされているらしい。

カエルは親切だった。授業料でおごれと言っていた割に、ファミレスで食事をおごってくれたし、ここまで道案内もしてくれた。作戦の上で、力を貸してくれることにもなったし、非常に有効な情報も教えてくれた。

今日は館長が練習には来ない曜日であるということ。昼間だけで、夜は他の地区の指導に行っている。ボスがいなければ、とりあえず朝真会館との全面戦争は避けられそうだ。それは幸先のよい話なのだが、杞憂がある。それはエロスの存在だ。チョコレートパレスが統括している地区の主席のような存在で、殺しにかけても、空手の腕も相当なものらしい。とにかくストイックかつ常識が通用しない相手なので、何をされるかわからない。

エロスとは昼間、パンダマンに宝くじを奪われた後にぼったり出くわした。確かに異様な雰囲気のある男だった。もしその時、タコヤキの回収ではなく、俺たちを殺すことが目的だったら、もうその時に命はなかったらしい。切れ長の目、その奥にうっすらと見える瞳は闇のように黒かった。

「パンダマンはそろそろ突入したかしら」

「あと、もう少し待った方がいいんじゃないかな」

チョコレートパレスから、門下生と思われる道着姿の男がぱらぱらと駐車場にやってくる。カエルの情報では夜の部は九時まで。そのため、九時を過ぎれば練習が終わり、掃除を済ませたら順に帰っていきだろうということだった。

カエルの意見は適切だった。ただ、カエルが喋る度にミユウちゃんが目をキラキラさせて褒めちぎるのが気に入らなかった。

「パンダマンがどの入口を使うかだよな。正面から、というのはあからさま過ぎる。脇からの入り口なら不意をつける」

チョコレートパレスには何箇所か出入り口がある。大型トラックが入れる大きな入口は錠をかけ封鎖しているが、人が通るための事務所のようなガラス張りの入り口が正面左手にある。そこが通常の出入り口で、門下生が利用する。

裏手にはエアコンの室外機と雑草の密林で実質使われていない裏口がある。こちらも錠が閉まっている。正面から右手に回り込むと、建物の側面に通用口がひとつある。そこは夜錠をかけて退出する、鍵当番が使う入口だ。恐らくここは練習中には錠はかかっているだろうということだった。

実質正面と、脇の二か所が侵入口になる。まず、パンダマンは脇の入り口を利用するだろう。

俺はその話を聞いた時、「パンダマンはチョコレートパレスのこと、そんなに詳しいんですか」と質問した。すると、カエルは「タコ頭から情報聞き出したって。タコ頭本人からさっきメール入ってたから間違いはないよ」と答えた。なるほど、隙のない情報だ。

「まあ脇からでしょうね。そういう情報も入ってるんだったらなおさら。だから正面をここから見てても、パンダマンがすでに侵入してるかどうか分からないわ」

「まあ、門下生がばらばら出てきているのだから、中ではまだ問題が起きてないという証拠だろうね。門下生がどれくらい残ってるかはこの駐車場に残っている車の数である程度分かるし。あまり門下生が出てこなくなれば、パンダマンが侵入したという証拠になるかも知れないね」

車二台でチョコレートパレスに到着すると、カエルは「それじゃ幸運を祈る」と言って去っていった。その表情はさすががしかった。

俺、カンケーないし。

そんな気持ちがありありと伝わってくる去り方だった。

鼓動の打ち方が、時間と比例し強くなる。一步間違えれば、死ぬかもしれない。そんな危険が孕んでいるのだ。いっそ、帰りたい。そんな考えも素直によぎる。

九時十七分。ぱたりと入口から人の気配がなくなった。念のため、もう二分待った。出てこない。車はかなり少なくなったが、まだ残っている。大型トラック用の大きな扉の隙間からは光が漏れており、まだ中に人がいることがわかる。

パンダマンが動いたのだ。

正面からはそれらしい人影は無かった。建物の裏を伝って近づき、脇の入り口から侵入したのだろう。

「ミユウちゃん、行こう」

少し声が震えていた。ミユウちゃんはワンセグのテレビを急いで消すと、うん、と頷いた。

人の気配の失せた入口へ、俺たちは静かに近づいた。ガラスの開き戸からは玄関の様子しか伺えなかった。扉で仕切られ、その奥が道場になっているらしい。玄関には誰もいない。また、物音も特に聞こえない。

「では、入ってみようか」

ミユウちゃんは無言でうなずくと、俺にも聞こえるくらい大きく唾を飲み込んだ。ミユウちゃんも緊張しているのだ。もし何かあっても、彼女だけは、命がけで守らなければ。

俺は意を決し、開き戸の持ち手を掴むと、扉を押して開けた。ふと手元を見ると「引く」と書いてあったが、まあ気にしないことにする。コンビニでもよくあることだ。

玄関で一応靴を脱ぎ、扉にそっと近づいた。

「ねえ、逃げる際にすぐ動けるように靴は履いて行った方がいいんじゃない？」

小さな声でミユウちゃんが云った。

「その時ははだしで逃げるさ。曲がりなりにも道場に土足では上がれないよ。靴下は履いてるけどね」

ミユウちゃんはイマイチなっとく出来てない様子だったが、靴を脱ぎ、俺に従った。

扉をそっと十センチほど開けてみた。

中の様子に、俺は目を疑った。

パンダマンと弁慶の二人が、朝真会館の門下生だろう、道着姿の男たち十名程をすでにやっつけて縛りつけている最中だった。パンダマンと、弁慶には怪我の様子は無かった。

それほど切迫した雰囲気ではないらしいので、ある程度ほっとしたが、それでもこれからパンダマンと対峙しなければならないのは憂鬱だった。

俺は思い切って扉を開けた。

「パンダマン、もうやめるんだ。朝真会館は宝くじを奪ってない！」

その言葉を聞いて一番驚いていたのはパンダマンだった。

「え、ハ、隼人？　なんでお前ここに？！　つつーか、どうして宝くじのことまで知ってんだ？」

俺はかけ足で二人に近づいた。

「説明はあとで。とにかく今は立ち去ろう」

「そうはいかぬ。宝くじの所在をはっきりさせねば、今宵奇襲をかけた甲斐が無くなる」

弁慶が言った。

「宝くじは俺が持ってる。俺が雲運運団の事務所から奪ったんだ」

それを聞いて一番驚いたのはパンダマンだった。

「ぬあんだと！　いつどうやってだよ！　がーっ、わけがわかんねえ」

そう言っ取りあえず俺の頭をコツンと殴った。昔からおやじはそうだった。ちょっと腹が立つと俺の頭を気軽に叩く。

「しかしなんでお前がここにいる？　宝くじを奪ったのが本当なら、ここに姿を見せずどこか高跳びした方が安全だろう。今日あれだけ追いかけて懲りてるはずだ。なんで今さらここに来る」

俺はパンダマンの目……と思われる所を見ながら言った。

「おやじなんだから。判ってるんだ。自分の親が死ぬかも知れないのに、ほっとけないだろ。もし、俺が宝くじを奪ったのが原因で死んでしまったら、俺は親殺しと一緒にってしまうし」

パンダマンは頭を抱え、その場に膝をついた。非常にわかりやすい反応だ。

「……ちくしょう。どこで気付いた？　俺が父親だって。顔はこうして隠しているし、電話だって非通知だったし」

俺は落ち着いて話した。一刻も早くここを去るには、パンダマンの混乱を解くのが先と判断したからだ。

「俺があれ？　と思ったのは、弁慶に会った時だ」

「それがしに会った時とな」

弁慶が首をかしげた。「はて、何か失言でもござったか」。

「いや、普通は多分聞き逃すところだと思う。気にならないと思う。けど、朝からどうしてパンダマンが俺の電話番号が分かったのか？　疑問に思ったから引っかかったんだ。弁慶は初め俺

に会った時、『隼人殿』と呼んだよね。パンダマンより連絡があり、俺が来ると聞いていたと。パンダマンは俺の携帯の番号を知っているばかりか、名前まで知っていたわけだ。なぜか。父親だったから。そう考えると全ての疑問がすっと解決したんだ。昨日の夜、カエルとハチマキが俺の家を探し当てた時、その住所を聞いてパンダマンはそれは自分の息子の住むアパートだとすぐに気付いた。相手が息子だから、電話番号も、名前も簡単にわかる。でも、自分の正体は知られたくない。そこで俺とコンタクトをとるときはボイスチェンジャーを使いながら、非通知で電話をかけてきた」

「ボイスチェンジャーは、携帯電話のアプリでできそうね」

ミユウちゃんがぼそりと言った。なるほど、気付かなかった。

「弁慶に連れられ、実際にパンダマンに会った時、その体格、立ち方がすぐにおやじとダブった。俺はぶちのめされながら、確信してたんだ。けど、まだ完全じゃない。もしかしたら、違うかもしれない。そこで確実に父親であることを確認する方法をとった」

名探偵ミユウちゃんがぱちんと指を鳴らした。

「電話ね！」

「その通り。今まで一方的にパンダマンからの電話を受けるばかりだったけど、俺は自分の父親に電話をかけた。するとそこで出たのはパンダマンだった。俺から宝くじを奪い、気が緩んだのだろう。父親として電話に出るのではなく、パンダマンとして電話に出てしまった」

パンダマンは両手を床につけ、「あああああ！」と慟哭した。

「俺は確信した。だから、許せなかった。自分の息子を事件に巻き込み、自分の夢だかなんだか分からないけど、利己的な理由で宝くじを手に入れてよしとする。そんなおやじがサイテーだと思ったから。俺はカエルに情報をもらって雲運運団の事務所から宝くじを奪ったんだ。困ればいい。そう思って。

けど、なんだよ。よりによって朝真会館に奪われたなんて勘違いしやがって。死んだらどうするんだよ。もし奪われた相手が朝真会館ならそっとしとけばいいじゃないか。死んだらしょうがないだろう」

俺は途中から涙を流していた。俺は、本当におやじが嫌いだった。サイテーなおやじだと思っていた。おやじとの記憶を辿ると、尊敬できるエピソードなんてほとんどなかった。けど、おやじはおやじ。自分の血のつながった親だから。どうしてもほっとけない。これが、愛なのだろうか。俺にはよくわからない。

「だから即、逃げませう！　ここは危ないわ。安全なところに行って、今後のことを考えましょう」

ミユウちゃんが言葉をつないでくれた。

「なるほど。委細承知。ここは一旦撤収が吉であろうな。パンダマン殿、ひきあげよう」

最後のひとりを縛り上げた弁慶も、納得したようだ。

「うう、わからねえ。まだ、わけわかんねえけど。隼人、お前はみんな気付いちまったんだな。少しは知恵が回るようになったもんだ。よしよし。難しいことはあとだ。確かにすぐにずらかろうか。もう少しでこの道場の偉い奴がやってくる。やって来てから『ごめんなさい。勘違いして

ました』では話が済まないからな」

それを聞いて俺の背筋がぞっとした。

「え、なんで。偉い人呼んだの？」

パンダマンは立ち上がり、当然のようにいう。

「そりゃ呼ぶさ。だってここにいる下っ端は宝くじのこと全然知らないんだぞ。じゃ、偉い人連れて来いって話になるだろ」

「いつくるの」

「さあ。ついさっき縛っている時、ひとりに電話させたからな。館長は残念ながらいないが、エロスというエロそうな名前のヤツに電話したらしい。そいつもさっき道場出てったばかりだから、すぐに戻ってくるだろうということだけだ」

「じゃ、まじで急がないといけないじゃん！」

「うむ」

弁慶はミュウちゃんを軽々と抱えると、入って来たと思われる脇の入り口に向かって走り出した。よくみると背中に荷物を背負っていない。レーザーディスクや武器などを持っていないということだから、人の一人くらいは軽いものなのだろう。

俺とパンダマンも二人で顔を見合わせると、弁慶に続いて走り出した。

と、そこで。目指す扉から一人の男が入って来た。

「ちょっと待ちな。逃がすわけにはいかない。まあ少し話をしようじゃないか」

俺たちは止まった。弁慶も凍てついたように、ミュウちゃんを肩に乗せながらがちがちに固まっている。それくらいの威圧感のある男だった。

道着姿から黒のスーツに着替えていた。ほんのりと金属の臭いが漂ってくる。威圧的な切れ長の目は、その視線自体が武器でもあるかのような畏怖を感じさせる。

気をつけろ。カエルが言っていた。

昼間出会った男、エロスに間違いないだろう。

つづく！

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

ごぶさたしております。
しろあです。

本当は1年ほど前に続編をアップしていく予定でしたが、
なんかかやで……一番は特に求められてもいなかったのもので……そのまま放置しておりましたが。
やはりこんな面白い小説を尻切れトンボにしておくのは夢見が悪い！ さっさと完結させねば！
と一念発起し、完結までどこどかっアップ再開いたしました。

ご存知の方もいるかも知れませんが、
この作品は小説現代長編新人賞に於いて1次審査を通過しました。
嘘だと思ったら昨年4月号あたりを確認下さい。ちゃんと載ってますよ。
そんな小説現代ですが、残念ながら今年4月より休刊になったようですね。
私が学生の頃からずっと応募していた賞ただけに、淋しさを覚えます。

さて。
最近ではセミプロのライターとしてセコセコ無なしの文章を書いております。
もしかしたらあっちこちでさらっと読んだ文章、私が書いたものかも知れませんね。

なかなか書き物で身をたてることは難しいですが、コネを作って脱サラ……難しいなあ……できたらいいなあと思っています。

「ぷれみあむみにっつ」、本格的に朝真会館との対決が盛り上がってきました。
ラストで登場した ”エロス”。彼との熾烈な戦いがはじまります。
こっちには弁慶がいるから安心だろう……否。
エロスには弁慶を凌ぐ能力があるのです！

気になりますか、なりましたか？！
(なっていないか??)

続編を待て！！